
ゲート ～黒き真実～

崎浜秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲート ～黒き真実～

【Nコード】

N0433Y

【作者名】

崎浜秀

【あらすじ】

ゲームの世界ゲート。

魔族と人間の争うその世界に導かれた黒兎裕也は、魔族となり人間と戦う事に。

何故、自分が人間と戦わなければならないのかと、悩みながら魔王セラとケルベロスと共に世界を巡る。

第1話 登録

その日、黒兎裕也くろとゆうやは、授業をサボり、屋上で昼寝をしていた。別に、授業が嫌いと言うわけではなく、今日はたまたま調子が悪かっただけ。

この頃、学校に着けば腹痛を起こし、保健室に通うと言う事の繰り返しだったが、流石に何日も続けば、保険医が心配するので、それを避ける為に屋上に来ていた。

別に病気と言うわけでもなく、精神的なモノの為、休んでいればすぐに痛みも引く。

「ふう……痛みも大分楽になったか……」

起き上がり、そんな事を呟き、空を見上げる。

「今日も青天か」

雲一つ無い——と、言えば嘘になるが、それ位今日は晴れていた。緩やかに流れる小さな雲が時折太陽を隠すが、それでも日差しは強く照り付けている。

ぼんやりと空を見上げていると、非常口のドアが開き、一人の女子生徒が入ってきた。黒髪に真っ赤なカチューシャをしたその女子生徒は、周囲を見回し、

「全く、黒兎の奴、何処行っただ？」

独り言の様に呟く女子生徒を、給水タンクの下から覗く。

「ヤベエ……なんで、白雪の奴が……俺を探してるんだよ？」

隠れる様に身を屈め、ブツクサと呟く裕也はゆっくりと、その場を移動する。

「黒兎の奴、ここに居るって情報があったんだけど……」

彼女は白雪冬華^{しらゆきとうか}。裕也とは向かいに住んでおり、いわゆる幼馴染と言う関係に当たる。ただ、裕也も冬華も互いにあんまり干渉しない為、幼馴染と言ってもそこまで仲が良いと言うわけでもなかった。顔を合わせれば挨拶をする。その位の関係だ。親同士は仲が良いが、裕也にとって彼女は苦手なタイプの人間だった。

「おーい！ 黒兎！ 居るんだろ！ 十秒待ってやるから、出てこーい！ いーち……にーい……」

数を数えだす冬華。身の危険を感じる裕也は、今の状況を打破する為に策を張り巡らせる。

「……ろーく……なーな……」

その間も、刻々と刻まれるタイムリミット。

腕を組み、必死に考え込む裕也だが、結局策は浮かばず、渋々冬華の前に姿を見せた。が、その時丁度冬華の口から「じゅうつ！」と、告げられ、同時に二人の視線が合う。

「時間切れ」

言葉の後ろに音符でも付くんじやないかと言う程、笑みを浮かべる冬華に、表情を引き攣らせる裕也。ゆっくりと裕也に近づく冬華は、拳を握り締めると、

「随分探しちゃった。今まで、一体何処に行ってたのかなあ？」

「何処って……ちよつと腹が痛くて……」

「だったら、保健室に居ようよ。私、凄く走り回っちゃったよ？」

笑顔の威圧と言うのはこの事を言うのだろう。目の奥が笑っていない冬華に、ニコツと無理矢理笑みを浮かべ右手を上げ、

「それで、俺に何の用？」

と、さり気無く尋ねると、思い出した様に冬華は声をあげる

「そ、そうだった！ あんた、今日日直でしょ！ ちよつと、来なさいよ！ 準備するモノがあるんだから！」

「日直？ ……そう言えば、そうだったような……で、何で、白雪が？」

「私も、日直だからよ」

怒りのこもった声の冬華が拳を振るわせているのを見て、苦笑した裕也は「そうだったの……」と、小さく呟いた。

「全く……ほら、パソコン室行くわよ」

「パソコン室？ 何で？ 今日、パソコンを使う授業は無いはずだろ？」

今日の時間割を思い出し、不思議そうな顔をする裕也に対し、冬華も眉間にシワを寄せ、

「知らないわよ。熊谷が使うって言ってたんだから、熊谷に聞きなさいよ」

「先生を呼び捨てにしているのか？」

「いいのよ。私、アイツの事嫌いだから！」

腕を組みソッポを向く冬華に、裕也は苦笑する。

熊谷とは、二人の担任の先生で、歳は四十ちよつと過ぎの小太りの男性教諭だ。冬華がどうして、そこまで熊谷を邪険にするのかは知らないが、裕也もどちらかと言えば熊谷を嫌っていた。

「しょうが無い……何かと文句を言われる前に、準備しておくか……」

「全くね。はい。鍵」

冬華が裕也にパソコン室の鍵を手渡し、それを何気なく受け取った裕也は、不意に小首をかしげ、

「……鍵を渡して、お前はこうする気だ？」

「もちろん、教室に——」

「おい。俺に、全部させる気か」

「そ、そんなわけ無いじゃない！ と、トイレよ。トイレ」

疑いの目を向ける裕也に冬華はそう告げ、一人足早に屋上を立ち去った。

あとに残された裕也は小さくため息を吐くと、「行くか」と、屋上を後にした。

第三校舎の三階奥のパソコン室の鍵を開けると、暗がり一台だけ起動したモニターを発見した。

「まったく、何処のクラスだ？ ちゃんとシャットダウンしろよな……」

部屋の電気をつけ、起動したパソコンの前へと移動した。モニターには『ワールドオブレジェンド』と、デカデカとトップで映っていた。

ネットゲームの類なのだろう。裕也もこの手のネットゲームな何度か挑戦した事があるが、挫折した。基本的にこの手のゲームはお金をかけなければ強くなれないからだ。

「誰かが、ここでネットゲームしてたんだなあ……。全く、何考えてんだよ……」

モニター前の椅子に腰を下ろし高さを調節する。プシューと音を立て、裕也の体がスツと落ちる。別に背が低いわけでは無いが、パソコン室の椅子に座ると、ついつい一番下まで下げてしまうのだった。

何度か、椅子で遊んだ後、モニターに向き直った裕也は、マウスを握り画面をスクロールする。

「エーッと、どんなゲームなんだ？」

モニターにかかれた登録無料という言葉に、思わず好奇心が生まれた。元々ゲームは好きな為、無料なら少し位やってみないと、思っただのだ。

ゲームのストーリーを軽く読み、システムとゲームの流れを読む。特にややこしい設定とかは無く、勇者率いる人間軍と魔王率いる魔族に分かれて戦うシンプルなアクションゲームの様だった。

部屋のホワイボードの上に立て掛けられた時計に目を向け、まだ時間に余裕がある事を確認した裕也は、そのままゲームスタートのボタンをクリックした。

ゲームが起動し、タイトルとパスワード入力画面が映る。

「えっと、俺は新規登録と……」

新規登録のボタンをクリックすると、キャラ作成画面へと移動する。

「んじゃ、ユーザーネームはクロトで、いいだろ。性別は男！ 背丈は標準かな？ 戦闘タイプか。とりあえず、接近戦タイプでいいかな。髪型は――目は――口は――」

と、慣れた手つきでキャラを作成する。

そして、最後に二つの選択肢が映し出される。勇者率いる人間軍か、魔王率いる魔族かだ。

暫くその画面を見たまま、裕也は悩み、結果魔族を選択した。理由は簡単だ。好奇心だ。ネットゲームは幾つもやって来たが、モニター側になって勇者と戦ってみたいと、思った。

「よし。これでオッケー！ 登録完了！」

登録完了のボタンをクリックすると同時に、突如モニターが強い光を放った。

「うわっ！ な、何だ！」

『登録完了しました。これより、ゲートを開きます』

「げ、ゲートって！」

驚きの声をあげると、突如モニターに丸い穴が開いた。真っ暗で奥が全く見えないその空間に、思わずたじろぐ裕也が、その場を離れようとした瞬間、その穴が勢いよく裕也の体を吸い込み空間を閉じた。

そして、部屋には静けさとモニターのついたパソコンだけが残さ

れた。

第2話 突然の襲撃

暗い暗い闇が続く。

目を閉じているのか、開いているのかも分からない闇の中。分かったのは自分が落ちていると言う事だけだった。

この状況に、裕也は思う。これは夢なのだと、堅く瞼を閉じる。早く目が覚める事を願いながら――。

「――ッ！」

誰かの声が聞こえた。夢からの帰還。淡い期待を胸に秘めながら、裕也はゆっくりと瞼を開く。眩い光に視点が合わず暫くボンヤリとした光景が映る。何か人影の様なモノが見え、だんだん声はつきりと聞こえてきた。

「おい！ 起きろ！ いつまで寝てんだよ」

幼い子供の様な声。全く聞き覚えの無い声に、裕也は不安になりもう一度ゆっくりと瞼を閉じた。

「待て待て！ 今、完全に目を覚ましただろ！」

「これは夢だ。早く目を覚ませ。俺」

怒鳴りつける声を見捨て、そう自分に言い聞かせる裕也だが、その体を揺すりそれを妨げる者が居た。

「起きろって！ コラ！ 寝たふりしてんじゃねえ！ てか、無視すんな！」

「だーっ！ うっせえ！ 俺は、今、夢から覚めようとしてんだよ

！」

あまりのしつこさに目を開き、思いっきり怒鳴る。と、同時に目が合う。ジト目で裕也の顔をジッと見据える褐色の肌をした一人の少女と。赤い瞳が裕也を見据え、やや尖った耳がピクッと動いた。

「チッ。来たか。ここは危険だ。私と一緒に来い」

突然、真剣な表情を浮かべたかと思うと、裕也の腕を掴み無理矢理立ち上がらせ走り出す。何が何だか分からぬまま、少女に引かれて走っていると、先ほどまで裕也が居た場所で大きな爆音が轟き、火の手が上がる。

見た事の無い木々や葉が燃え、黒煙が空へと昇る。

「な、何だよ……コレ……」

その光景に足を止めると、裕也の腕を引いていた少女もゆっくりと足を止め振り返る。

燃え上がる木々。

響き渡る人の声。

轟く爆音。

これが、夢なら本当に早く覚めてくれと願う。

だが、そんな裕也に少女は静かに言う。

「私も初めてこの光景を目の当たりにした時は、そうだった」

ポンと右肩を叩かれ、顔を少女の方へと向ける。悔しさに下唇を噛み締める少女。その目に浮かぶ涙に、裕也は我に返った。と、同時に燃え上がる森の向うから猛々しい声が無数聞こえてきた。

「うおおおっ！ 魔王軍を叩きのめせ！」

「魔王城はすぐそこだ！」

「手柄を上げろ！」

次々に聞こえてくる男たちの声。そして、悲鳴。何が起っているのか分からず、その場に立ち尽くす裕也の腕を、少女はまた引っ張った。

「急げ。奴等に見つかったら、殺されるぞ！」

「こ、殺される！」

少女の口から出た言葉に驚く。

「さあ、急げ！」

と、少女が走り出そうとした時、正面の茂みから斧を持った大男が現れた。鎧を纏い、右胸の位置に十字のエンブレムが描かれている。その大男を見るなり、少女は体を震わせる。

「お、おい。だいじょ——」

「魔族見つけ」

裕也が少女に声を掛けるより先に、大男の野太い声が周囲を制する。その声が続く様に、茂みの向うから別の声が響く。

「何！ 魔族が！」

「今、応援に行くぞ！」

声が聞こえたかと思うと、茂みで葉が擦れ合い音を奏で、無数の男女が飛び出す。様々な衣装の男女。まるで仮装大会の様なその格

好に、困惑する裕也。しかも、彼等は手に刃物や鈍器を持ち、明らかな敵意を向けていた。

「おいおい。たかがザコ相手にこの人数はねえだろ？」

「馬鹿言えよ。魔王城の手前だぞ？ そんなザコばかりなわけねえだろが」

目の前にたたずむ斧を持っていた大男に、いかにも剣士風の格好をした男が忠告する。その言葉に「仕方ねえなあ」とぼやく大男は、後ろに佇む僧侶の格好をした女に顔を向け、

「おい。強化の術で俺を強くしろ」

「分かっているわよ。言われなくても、光の祝福！」

女が声をあげると、大男の体が輝き出す。

「力がわいてくるぜ」

「言って置くけど、効果は——」

「わーってるよ。五分だろ？ んなけありや十分だろ」

「だから、油断するなって言ってるだろ！」

剣士風の男が再度忠告するが、大男は「はいはい」と、軽く受け流す。

そして、視線を裕也と少女の方へと向けた。その表情に、裕也は直感する。殺されると。わけも分からない場所で、わけも分からないまま、死ぬそんなイメージが脳内に鮮明に浮かぶ。

そのイメージを振り払おうと、男から視線を反らした時、隣りで震える少女の顔が視界に入った。怯え震える彼女を、どうにかしないといけないと、裕也は視線を上げ大男の顔を見据える。裕也だって怖くないわけじゃなかった。それでも、震えを押し殺し、毅然と

した態度で大男へと告げる。

「や、やめろ！　こ、この娘が何をしたって言うんだ！」

僅かに声が震えた。それでも、はっきりした口調で述べたその言葉は周囲の人に届いたのだろう。沈黙が暫しの間続いた。だが、その沈黙が一瞬で破られる。噴出した笑いを皮切りに、次々と笑い声が周囲にこだまし、大男が自分の頭を指差し、

「恐怖で頭がいかれたか？　魔族」

「お、俺は、魔族なんかじゃない！　に、人間だ！」

大男の言葉にそう反論する。が、大男は更に大声で笑うと、

「ガハハハハッ！　に、にん、人間だと、ガハハハハッ！　笑わせるじゃねえか！　テメエの何処が人間だああああッ！」

大男が振り上げた斧を振り下ろした。突風が吹き抜け、地面が碎けた。大男が下ろした斧は裕也と少女の丁度真ん中に落ち、衝撃とともに土煙と碎石を飛び散らせる。衝撃に吹き飛んだ裕也と少女。少女は大木に背中を打ちつけ意識を失う。

一方、裕也は地面を横転し、重量感のある鎧を着込んだ男の足に体をぶつけ動きを止めた。飛び散った碎石で皮膚が裂け、体中いたる所から血が滲む。痛みに体を震わせる裕也が、ゆっくりと顔を上げると、男が振り上げたランスを裕也に向けて振り下ろした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0433y/>

ゲート ～黒き真実～

2011年12月7日00時33分発行